

平成30年度第2回南あわじ市総合教育会議会議録

1. 日 時 平成30年11月2日(金)

午前10時00分開会

午後 0時00分閉会

2. 場 所 南あわじ市役所 第2別館 第5会議室

3. 協議事項

(1) 学校再編について

① 西淡志知小学校の再編について

② 三原志知小学校の再編について

③ 倭文中学校の再編について

④ 沼島中学校の再編について

(2) 英語防災教育について

(3) 今後の教育施策について

① 放課後子ども教室について

② 学校開放について

③ 高校生の流出について

4. 出席又は欠席した構成員氏名

出席構成員

<南あわじ市>

南あわじ市長 守本 憲弘

教育長職務代理者 数田 久美子

教育委員 岡 一秀

教育長 浅井 伸行

教育委員 轟 孝博

教育委員 宮崎 典弘

<学校組合>

管理者 守本 憲弘(兼務)

教育長職務代理者 狩野 時夫

教育委員 宮崎 典弘(兼務)

教育長 浅井 伸行(兼務)

教育委員 数田 久美子(兼務)

教育委員 本條 滋人

5. 事務局関係職員氏名

総務企画部付部長 青島 一路

教育次長 山見 嘉啓

学校教育課長 山川 直樹

体育青少年課長 原口 言美

教育総務課課長補佐 板野 あゆ美

ふるさと創生課長 栄井 賢次

教育総務課長 中村 尚之

社会教育課長 福田 龍八

青少年育成センター所長 永田 加織

教育総務課課長補佐 新地 美里

開 会 午前10時00分

【中村教育総務課長】 失礼いたします。

定刻となりましたので、只今より、平成30年度第2回南あわじ市総合教育会議を開催させていただきます。

なお、本日の出席者名簿、会議次第並びに協議事項の説明資料等につきましてはお手元にご用意させていただいておりますのでご確認ください。また、本日の総合教育会議におきましては守本市長より傍聴を許可しております。傍聴される方は南あわじ市総合教育会議傍聴要領に準じて傍聴されますようお願いいたします。

あと、本日の議題にあります学校再編につきましては、倭文中学校の再編にて、組合立広田中学校と関係するご意見以外は南あわじ市教育委員に限定させていただきたいと思っておりますので、ご了承下さいますようお願いいたします。

それでは、主催者であります守本市長より、ご挨拶申し上げます。よろしくお願い致します。

【守本市長】 皆さま、おはようございます。

本日は、第2回南あわじ市総合教育会議に、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。また、教育委員の皆さま方には、日頃から教育関係はもちろんのこと市政全般にわたりまして、さまざまなご理解ご支援いただいておりますこと、御礼申し上げたいと思っております。

私も1年8か月くらいになりますが、常々考えるのが、町の魅力というものをどうやって束ねていくかということなのですが、協調の在り方というのは非常に重いものとして痛感しております。もちろん若者が戻ってくるためには、仕事があればいけない、住まいとか利便性もなければいけないということですが、ある意味それが必要条件だと感じておまして、そのうえで実際に若い人たちが、この町に住み続ける、あるいは住みたいと思うかどうかの大きな大きな判断要素として、この町で子どもを育てたいと思うかどうか、ということがあろうかと思っております。特にそのウェイトが高くなってきているのではないかというように思っております。そういう中で教育分野について、この総合教育会議というものをつくって市の行政部門と教育部門が方向を一にして取組むという形になっているんだというように理解をしているところです。本日の協議事項の学校再編については、これまで何度かご審議をいただいているところですが、ある程度まとまりがついてきたのかなと思っております。また本日も忌憚のないご意見を聞かせていただければと思っております。それ以外にも、今取組んでおります「英語・防災教育について」、それから、より幅の広い「今後の教育施策について」、このあたりになると、行政と一体化している部分が非常に多いと思っております。この中でも最後の「高校生の流出について」ですが、高校生は本来この総合教育会議のカテゴリーには入らないのですが、あえて入れさせていただいたのは、この間、

公立高校三校の校長先生がお見えになりまして、淡路島では高校生の段階での流出が進んでいるということで、これに対して何かしていかなければいけないのではないかと、問題提起されたということもありますので、せっかくの機会ですので、委員の皆さま方のご意見をおうかがいしたい、また、私の考えているところも少しお話をさせていただきたいと思っておりますので、あえて入れさせていただきました。ということで、盛りだくさんになっておりますので、効率的に審議を進めさせていただきたいと思っておりますので、その点については、ご協力の方よろしくお願ひしたいと思います。いずれにしましても、この会議で具体的な施策が固まっていくというスタイルですので、是非、積極的なご意見をいただければと思っておりますので、よろしくお願ひ申し上げます、挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願ひいたします。

【中村教育総務課長】 次に本日の協議事項に入ります。

それぞれの項目ごとに事務局からご説明申し上げますので、進行につきましては守本市長、よろしくお願ひします。

【守本市長】 それでは議長ということですので、よろしくお願ひいたします。

進行については、協議事項について基本的には事務局より説明させていただいて、皆さま方にご審議いただくという形で進めさせていただきます。

最初に「学校再編について」でございます。

それでは、事務局から説明お願ひいたします。

【山川学校教育課長】 それでは学校再編について、ご説明させていただきます。

まず、次第の①、②の西淡志知・三原志知小学校の再編について一括して説明させていただきます。当初の方針としましては「三原志知小学校については、市小学校との再編を進める。西淡志知小学校については、松帆小学校との再編を進める」という方針で進めておりましたが、説明会をもったところ、保護者・住民の意見とも合わない部分が多く、また、4月に自治会代表・保護者代表から要望書をいただきました。要望書の内容について、重く受け止める必要があるということで、再度協議し、6月19日に合併協議会への回答書で、解決すべき3つの課題を提示しておりました。これを受けまして、同協議会の方で協議いただき、『「統合後の使用する校舎を西淡志知小学校校舎」「統合後の進学する中学校を三原中学校」という案を示し、10月4日に保護者対象に賛否を取ったところ、賛成：71票（内委任状25）、反対：0票、白票：2票の結果となった』という報告をいただきました。資料の4頁に文書の写しを掲載させていただいております。10月24日、保護者代表と自治会代表から要望書が出され、「大方の保護者の賛同が得られた」との報告をいただきました。これを受けまして、事務局の方で再度検討した方針案を申し上げます。

1) 方針 西淡志知小学校と三原志知小学校を統合し、校舎は、西淡志知小学校を

使用する。中学への進学先は、三原中学校とする。ただし、複式学級が出現するようになれば新たな再編計画の対象とする。

- 2) 理由 10月24日に出された志知地区保護者代表と自治会代表からの要望書を受けて、市から提示していた3つの課題は解決されたと考え、これまでの方針を変更する。
- 3) 年次 平成32年(2020年)4月を目標に準備を進める。
- 4) その他 統合に関する課題や検討事項については、両校に委員会を設置し、市教育委員会や保護者・地域等とも協議していく。

ということになっております。

続きまして、倭文中学校の再編についてでございます。倭文中学校の再編につきましては、「当面は存続する」「合同部活動を進めることで現状の課題を解決する」という当初の方針でございました。これも説明会を持たせていただきましたが、合同部活動自体にも、課題が見られるということ、また、保護者の方から「アンケートをもう一度取ってほしい」という強い要望もございました。7月にアンケートを再度取った結果を、資料に掲載させていただいております。このアンケートの結果を分析したものが(2)となっております。「統合に賛成」と汲み取れるものが58%、「存続・今まで通り」と考えられるものが37%、「その他」が5%という結果でございます。また、9月27日の「アンケート結果説明会」では、合同部活動反対、統合容認の意見が多く、中でも三原中との統合希望が多いことを説明しました。会の中では、「早く市の方針を決めてほしい」という意見も多く出されました。これを受けまして、事務局の方針案として

- 1) 方針 倭文中学校を三原中学校に統合する。
- 2) 理由 当初の方針で考えていた合同部活動に関しては、課題が多く、保護者の理解も得られなかったため、実施は見送った。その後の7月のアンケートでは、58%が倭文中学校の統合を容認しており、その中でも三原中学校との統合の希望が多いため。
- 3) 年次 平成33年(2021年)4月を予定。
- 4) その他
 - ① 平成31・32年度の倭文地区からの三原中学校への転入については、移行期間として校区外就学を認める方向で検討する。
 - ② 通学に関する課題については、今後検討していく。

ということになっております。6頁に資料も付けさせていただいております。

続きまして、沼島中学校の再編についてでございます。沼島中学校の再編につきましては、当初の方針のとおり進めていく予定でございます。

- 1) 方針 沼島中学校は当面の間存続する。
平成32年度から、沼島小中一貫校とする。
- 2) 理由 離島という立地条件から、「小中一貫教育」を進めることが、沼島の子ど

もたちの能力を最大限に生かす教育環境であると考えてる。

3) 年次 平成32年(2020年)4月より。

ということで、沼島小・中では、校長のリーダーシップのもと、すでに9年間のカリキュラム作成や、英語・ICTの取組を積極的に行い、小中一貫教育の準備を進めているということを伝えさせていただいております。

以上で説明とさせていただきます。

【守本市長】 事務局より説明が終わりました。

まず、西淡志知・三原志知小学校と沼島中学校の再編について、組合委員ではない南あわじ市の委員にご意見をいただき、倭文中学校については全員の委員からのご意見をいただきたいと思っておりますので、数田委員の方からお願いしたいと思っております。

【数田委員】 まず西淡志知・三原志知小学校の再編の方針案について、賛成します。原案と変わったのですが、その間に市民の方々の声が反映されて、こういう形になったということは委員会としても非常に良いと思っております。1点気になるのは、小規模校の特徴、三原志知の和太鼓は文化遺産とも言えるような、和太鼓文化の活躍なんですが、是非、大事に残していただければと思います。それから、先走りますが、後の空いた校舎をどう利用するかというところで、インターにも近いですし、どういう形で活用するのかを、市民の皆さんのご意見とか、協力などによって、地域の活性化とか市の活性化につながるような活用ができればと思います。場所的には島内だけではなく、県外からも活用していただけるようなことがあればいいかなと思います。以上です。

【守本市長】 轟委員お願いします。

【轟委員】 当初は西淡志知と松帆という形で統合問題を考えておりましたが、地域の方が小学校を残してもらいたいということで、西淡志知・三原志知で合併をし、西淡志知小学校を使用するという形になりました。それは地域が責任を持って、将来、複式にならないようにとか、今がスタートになりますので、これで終わりということではないと思っておりますので、これから10年先、15年先を考えて、地域の方で育ててほしいと思っております。人数的には小規模校でございますので、小規模校の特徴を生かした中で、子どもたちが大きな所へ行っても大丈夫なような形の指導をしていただければと思います。

沼島については、大変だと思っております。9年間の一貫教育を淡路島で行っている学校があるのかどうか分かりませんが、南あわじ市としては9年間一貫教育ということは初めてのことでございます。人数的に一桁人数であり、その中でどのように教育実践をやっていくのか心配ですが、これからの研究で小学校・中学校ともにやるように期待したいと思っております。前にもお話したのですが、私は、三原高校に28年

間勤めたのですが、最初の頃の昭和50年前後、沼島の子どもは本当に心の真っ白な子どもばかりでした。ところが、三原高校に来て何百人の中に入り、色とりどりに染まって問題行動を起こしたりということがありますので、特に、全くの小規模から外へ出た時にどうなるのかということも踏まえ、学校訪問をする時は、それは各学校にお願いをしているのですが、子どもたちにそのようなことがないようにしてほしいと思います。9年間の一貫教育は、我々も協力して指導していきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。以上です。

【守本市長】 宮崎委員お願ひします。

【宮崎委員】 西淡志知・三原志知小学校の再編についてですが、当初の再編計画で、西淡志知小学校と松帆小学校、三原志知小学校と市小学校ということで、私自身、再編するのであれば、人数の多い所で、子どもがいろいろな競争の元でという形での再編が理想だと思ひておりました。ですが、今回、保護者・地域の方々からの意見が出て、その意見も多数ということでおろそかにできないという話の元、今回の西淡志知・三原志知との統合の話が出て、その中にありました解決すべき課題も話し合った結果、今回の方針ということで、私も賛成いたします。この形で再編される両校とも、いろいろな文化的な行事があると思ひますので、どちらも活かして魅力ある学校になればと思ひます。

沼島中学校の再編については、小中一貫校ということですが、この先子ども的人数を増やすにあたって、今現在の状態で、どこまでこの形がいけるのか、すごく心配するところですが、沼島外からの子どもを呼び込むということで、それがどこまで上手くとれるか分かりませんが、小中一貫にすることによって魅力のある形で、いろんな生徒の呼び込みができるという形で進められたらと思ひます。以上です。

【守本市長】 岡委員お願ひします。

【岡委員】 大方の保護者の賛同が得られたということで、納得をせざるを得ないのかなと思ひますが、当初から思ひていたように、やはり大きな学校で子どもたちに学ばせてあげたいという思ひは、まだ変わってありません。せつかくのチャンスをいただいているのに、少し残念かなという思ひもあります。志知は魅力ある地域だと思ひます。まだまだ小規模校の状態が続くとは思ひますが、何とか人口増の見込みがあるような地域にならないかという思ひがあります。出来るだけ大勢の中で、子どもを学ばせてあげたいと強く思ひておりましたので、魅力ある志知に何とか人が集まってくれないかなという思ひを、住民として持っております。先日、神戸新聞に出て、地域の人たちに会った時に、声をかけているのですが、あまり反応が返ってきません。ということは、地域は納得しているのかなと思ひます。三原中学校へ行くという時に、西淡志知

からの距離というのはどうなのかなという思いがあるのですが、ちょっと遠いのではないかと思うのですが、そうでもないのでしょうか、よく分からないのですが。もう1点、西淡中学校が今でも人数が減っていつているのに、もっと減っていくということで、西淡中学校の人数減少の寂しい思いがあります。反対に三原中学校の方は、どんどん増えていつている状況の中で、倭文も三原中学校へという方向へいつています。私も、新任の時に三原中学校で6年勤めた学校ですので、非常に素晴らしい学校であることは、よく分かっているのですが、西淡中学校が寂れていくのではないかという心配があります。

沼島中学校についてですが、来年3年生が1人と2年生が0人、新入生が3人ということで、中学校は大変であるという気がしております。家庭教師のような教室の授業になってしまうのではないかという思いがあつて、何とか人口が増えるような対策がないのかなと思つております。何度も言いますが、子どもは子ども同士の中で育つということが非常に合理的だと思いますので、志知と同様、沼島も人口増に繋がるような対策が取れないかなという思いでいつぱいです。以上です。

【守本市長】 ありがとうございます。

数田委員、沼島中学校の関係で何かあれば、お願いします。

【数田委員】 人口の減少については、なかなか歯止めがきかないので、対策が必要だと思つています。地域の方の理解を得る説明の機会ももっと必要ではないかと思つています。人口がなかなか増えないというのであれば、教育活動の一環として、交流の場などできないかなと思うのですが、これは考えていただければと思つています。方向性としては賛成いたします。以上です。

【守本市長】 ありがとうございます。

基本的には、賛成ということで、いろいろと課題もありましたが、浅井教育長の方から、よろしくお願いします。

【浅井教育長】 皆さんからいただいた意見をまとめる形になるかと思つていますが、西淡志知・三原志知小学校については、今まで地域との意見交換、合併協議会との意見交換、そのようなことを踏まえてやってきましたので、教育委員会としてもそれを踏まえて議論してきたということで、方向性としましては、こういうような方向で打ち出させてもらつて提案させてもらったということになります。ただ、今言われたように、課題もたくさんあるということで認識しております。1つは、示された方向でいく過程の中で、いろいろな課題があるということ、具体的に言えば、校名、校歌、校章等についてどうするのかということについて、これから議論が深まっていくと思つていますが、この課題については、その他のところで示させていただいておりますが、合併協議会

と学校が一緒になって、議論していただけるとありがたいと思っております。また、両校の教育内容については、合併協議会、地域の方々の意見を踏まえながら、学校と教育委員会が擦り合せをしていくという形になるかと思っております。また、もう少し長いスパンで、将来への課題ということで、ご意見をいただきました。この方針の中にも出ておりますが、複式となった場合どうするのかということころは、他の学校も一緒なんです、新たな次の段階のことを考えるということになるかと思っております。また、そのようにならないように、どのような取組みができるのかということは考えていきたいと思っております。あと、これは西淡志知・三原志知だけの話ではないのですが、新しい学習指導要領の趣旨を踏まえた教育環境がどうあるべきなのか、その先に行く教育環境がどうあるべきなのかを考えた時に、市全体としてどういう形が良いのかということを考えていかなければならないと思っております。今の状況では、大きな物理的な教育投資はなかなかできにくい環境にあると認識しております。これは西淡志知・三原志知だけではなく、市としてどう考えるのかという議論は、平成23年の基本計画がある程度、課題が解決した時点で、次のことを考える必要があるのかなと考えております。あと、いただいた意見の中で、空いたスペースをどうするのかということころは、南あわじ市全体として議論していくべき内容だろうと思っております。ただ、人が集まるような施設にできたらと個人的には考えております。

沼島中学校の方は、非常に厳しいという面はご指摘いただいたとおりと考えております。人を呼び込む魅力ある取組みをどのようにしていくのか、ということの議論をしていきたいと思っております。それと、小中一貫というのは大きな流れかなと思っております。9年間を見通した取組みが大きな流れであると考えております。この沼島の小中一貫の取組みを通して、他方に小中一貫を広げていくということが、1つの接点になるのかなと、そういう意味でも沼島の小中一貫を充実させていきたいと考えております。以上です。

【守本市長】 ありがとうございます。

一旦、この2つでまとめさせていただきます。基本的な方針については、委員の皆さま方は賛成ということですね。

西淡志知・三原志知小学校の再編については、統合して校舎は西淡志知小学校、中学校への進学先は三原中学校という形で動いていくということを考えていることだと思っております。住民の方、PTAの方の議論の中でも、いくつかの話が出ておまして、1つは、小規模校の特徴ということで、1つの大きなモチベーションになったのは「志童」の存在ということだと私は理解しておまして、そういったものを今度は西淡・三原の両方の地域の方が一緒になって、どういう形でということは現場で決めていただけたらと思っておりますが、やっていただけるものと思っております。複式にならないように、人口増、これはもちろん住民の方だけ考える問題ではなく、市当局ももちろん考えていかなければいけないのですが、現実問題を言えば、実は南あわじ市も

相当空き家がある状況です。ただ、なかなか貸す人がいないという現実があります。そういったところ住民のご協力が必要だと思っております。こういう形を機に、そういう点でも先進的な取組みを市と住民と一緒に取り組んでいけたらと思っております。統合のプロセスについては、住民の方に相談してやっていくということで、私の希望をもう一つ言えば、後ほど校庭開放の話が出てくるのですが、これも住民のご協力というのが非常に重要なところがございますので、そういったところでも、PTAの皆さん、住民の皆さんのご協力、それをモデルとして示していただけるような学校にしていきたいと思っております。

沼島は、基本方針としては、こういう方向でということ以前からあったのですが、今すでに非常に子どもが減っている中で、どうやっていくかということが大きな課題ということでございます。教育委員会としても存続を考えていただきたいと思っております。市としても交流の機会、外との交流の機会というものを提供していく必要があると思っております。そういう点も含めて、これをスタートとして、どこまでやれるかやってみようということだと理解しておりますので、最大限の知恵だしをして、やっていって、その結果に応じて対応していくというように思っております。いずれにしても当面は小中一貫を進めていくという方向性が出たということでまとめさせていただきます。

以上で西淡志知・三原志知、沼島のお話とさせていただきます。次に倭文中学校の再編について、これは皆さまからご意見をいただきたいと思っておりますので、本條委員の方からお願いします。

【本條委員】 アンケートをまとめられた結果で方向性、方針案を出されているところですが、先日の教育委員会の時にお尋ねできなかったもので、アンケートの分析について、すみませんがご説明をお願いしたいと思います。2番の(1)でアンケートの回答結果を集約されていて、(2)①で倭文中学校の統合を容認しているのが58%と書かれているのですが、細かく見た場合に、(1)③倭文中を広田中と統合すると回答した保護者が3人、④自由選択の中に広田中を選んだ保護者が、20人のうち何人ということとは別として、数名はおられたのかなと思います。加えて、⑤その他の15人のうちにも11人が三原中には気持ちが固まっていないのかなという数字が出ているのかなと思います。そのあたりを分析されているのであれば、ご説明願います。

【山川学校教育課長】 (1)④の自由選択の中で、三原中が何人、広田中が何人というのは分からないのですが、過去の今までの傾向を見ると、三原中の方が多いということで、これを選んだ方は、自分のところはおそらく決められているんだと思いますが、他の方のことも考えて、こういう自由選択も可能であれば、これが良いのではないかという回答だと思います。⑤その他の15人ですが、1人の方が統合を選ばれているので、統合の方に入れさせていただきました。ですので、11人と3人と20人と1

人ということで「統合」が35人となります。「存続・今まで通り」の中の「その他11人」については、明確に「存続」、あるいは「今まで通り」と読み取れましたので、(1)①を選んだ11人と「その他」の11人で22人ということにしております。以上です。

【本條委員】 先ほどの、西淡志知・三原志知のようにきっちりと分かれていない中で、方針を出されていると思います。特に教育委員会としても自由校区というのは、考えられにくいという結論も出されていると思います。やはり校区は指定させていただく中での扱いかないところで、今後の方向性について、事務局の方針案に賛成いたします。以上です。

【守本市長】 岡委員お願いします。

【岡委員】 今現在、倭文小学校から三原中学校へ相当数の子どもが通っていると聞いております。親としては人数の多い学校で勉強させてやりたいという親の願いが出ているのではないかと思います。まだ通っていない人たちも、そういうような思いがあるのではないかなと思います。大きい学校で子どもを学ばせてあげるとは良いことだと思いますので、この案で良いと思います。それから31・32年と移行期間として校区外就学を認める方向ということですが、この移行期間の間に、たくさん子どもたちが移ってしまったら、どのように考えるのかと思います。方針が出たら、たくさん校区外就学を希望してくるのではないかなと思いますが、そのあたりのことも、極端に倭文中学校の生徒数が減少した時に、どのようにしていくのかというところが懸念材料だと思っております。以上です。

【守本市長】 狩野委員お願いします。

【狩野委員】 緑町時代は広田と倭文は一体だったかと思います。私たちも、中学校の頃に交流していた覚えがございます。その後、倭文と広田の統合案が出ては消え、いろいろな歴史的な経過がすごくあったと聞いております。その後、1市になりましたよね。緑町、西淡町、南淡町、三原町、1市になったら、そういう枠を取っ払って、地形的にも交通的にも考えたら、倭文は三原中学校かなと思ったりします。ただ、アンケートの中に、「倭文中を広田中と統合する」という回答が何%かありますよね。わずかな数ですが、やはりこの方たちの意見も十分尊重してほしいと思ったりもします。それから、少し離れますが、「広田」というのは南あわじ市から見れば端になるのですが、全島から見れば淡路島のへその位置にありますので、広田中学校へ行きたい子どもが増えるような、魅力ある、特色ある学校づくりをして、広田中学校も子どもが増えたらと思います。以上です。

【守本市長】 ありがとうございます。基本的には、この再編で進んでいくことで、かまわないというご意見でよろしいでしょうか。

【狩野委員】 かまわないということです。

【守本市長】 ありがとうございます。数田委員お願いします。

【数田委員】 三原中学校との統合ということで賛成です。当初、部活動だけ三原中学校へ行ってという案が出た時に、少し不都合ではないかと思ってたのですが、中学校の部活動というのは、最初から最後まで一緒に活動ができるというところで、中学校の部活動というのは長い目で見て、人生の大事な部分を占めると思いますので、途中から違うところへ行くというのは、なかなか難しいと思っておりましたので、そういうところではすっきりしたと思っております。私も倭文中学校の出身ですが、「しとおり」なんですよね。読み方が「し」なんです、「ひとおり」とよく言われ、淡路島の中でもあまり知られていなくて、「ひとおり中学は1人かと思ったら、大勢いてるな」と言われたりしました。なかなかこのような読みがないのですが、そういう意味では、なくなるということは寂しい面もあります。古い話になるのですが、私が倭文中学の頃は、部活がソフトボール部だったのですが、結構強かったので、地域をあげて、県大会へ行くとなったら、バス2台を出して応援に来てくださったり、合宿したら牛肉をいっぱいだとか、牛乳を昔の乳缶を持ってきてくださったり、ファンがいて毎日毎日練習を見に来てくれる方がいたりとか、そういう意味では地域と一体となってやっていて、嬉しかった思い出があります。そんな中で人口減少というのは、どうしようもないと思うのと、昭和32年の時でしたか、町村合併の時に広田に付く時、いろいろ問題はあったと思うのですが、先ほど、狩野委員がおっしゃったように、地理的に考えたら、低い方へ行くという流れは自然だと思し、あの時、なぜ三原町へ行かなかったのか、子どもながらに思ったことを覚えています。そういう意味では合併については良いと思います。先日、地域の方から、「自分たちも三原中学校へとずっと思っていた、やっとそれが叶った」とおっしゃる方もいて、そういう意味では流れるには自然かなと思います。倭文も人口減少で小学校がどうなるかという課題もあろうかと思いますが、倭文はインターに近いですし、土地活用みたいところで、もっともっと特色を活かして人が集まるような、住む場所としては良い所なので、人口を増やす場が増えるようなことを考えていただいて、地域の方ももう少し真剣になって、そういうことを一緒に考えていただければと思います。以上です。

【守本市長】 轟委員お願いします。

【轟委員】 すっきりしたなと思っております。我々もどうなるのかなという意識の中で

見守っておりましたが、結局、広田との合併はできなかったということで、このような案が出たことは、大変ありがたいなと思います。それから、平成31・32年、平成33年度には合併するというのですが、すでに三原中学校へ行ってしまって33年度には生徒が激減してしまって、閉校式が出来ないという状況にならないか心配をしております。倭文中学校が三原中学校に統合という言葉が正しいのか、吸収合併というのが正しいのか、よく分からないのですが。吸収合併となれば三原中学校のままですが、統合となると倭文中学校の看板も少し入れないといけないのかなと思ったりします。その辺は今後の課題だと思いますが、私は吸収合併だと思っております。この案には賛成しております。以上です。

【守本市長】 宮崎委員をお願いします。

【宮崎委員】 私自身、広田出身ということで、最初は旧緑町の括りで考えておりました。実際、私の子どもも今年の3月まで広田中学校に行っておりまして、倭文小学校の方から広田中学校の方に通っていた子と、仲良く部活動とか、いろいろと一緒に過ごしてきているところを見てきたので、少し寂しい反面、実際どうなのかなというように思いながら、この会に参加しておりました。今までの統計の三原中学校の方に生徒が流れている率と、保護者のアンケート結果を見て、三原中学校と広田中学校の数字を見ると、このような割合で子どもが異動しているんだなと改めて見させてもらった上で、やはり、通学路の安全面であったり、地域的なところを見たら、三原中学校との統合は賛成せざるを得ないのかと思いました。実際に倭文から広田に来てくれている子どもたちとは、小学校の頃からずっと付き合いがあって、人間関係的に良いものがあるのですが、全体的に見ましたら、子どもたちは多くのところで揉まれる方が良いという考えのもとで、今回の方針の三原中学校との統合ということに賛成します。以上です。

【守本市長】 ありがとうございました。

まとめさせていただくと、情動的なものは当然残ると思うのですが、基本的な方向としては賛成ということで、倭文中学校は三原中学校に統合するという、課題はあるということですが、これも含めて教育長の方からお願いします。

【浅井教育長】 中長期的なスパンを考えた時に、これがベストな方向かなと思っております。まずは、今の状況は良くないということ、子どもたちにとって、どんどん抜けていくという環境は良くないということで、当面は何とかそれを止めたいということで、合同部活動を出したという経緯があります。それが18%くらいの賛成があったと思いますが、その他の意見の方が多かったということで、次の方策を考えさせてもらったということです。アンケートの結果はバラバラで、選択肢の関係もそうですが、

その選択肢から見ればバラバラなんですけど、中身を見ると、課長が言った中身になるだろうということです。それと結果として、今の現状、これから方向を出した時に、考えられる子どもたちの動きを考えると、やはり三原中学校しかないのかなと思っております。地域の心情、いろいろとあると思っております。この前の説明会でも、反対、全員ではないのですが、ある方が「強行に言われている」と、そのようなことを考えて、地域にもう一度戻した時に反対があるだろうと考えております。「方向性として今の状況は良くない、だから次の事を考えさせてもらう」ということを丁寧に説明させてもらいながら、地域に説明していければと思います。その中で課題も出ておりますが、交通手段等ありますが、一番大きな課題は岡委員が言われた、移行期をどう乗り切るかというところが、一番大きな課題だと思っております。この方針を出した時に、子どもたちがどう動くのか、親御さんがどう動くのか、ある程度の予想はできるというような中で、今いる子どもたちにマイナスにならないように、出来るだけ、どんな配慮ができるのかというようなことを考えていきたいと思っております。以上です。

【守本市長】 再編についての協議をまとめさせていただくと、いずれも教育委員会事務局の方針に賛成ということでございます。進めるうえでの留意点をお伝えいただいたのですが、将来に繋がっていく話ですので、人口増とかですね、これは当市において非常に重要な問題ですので、こういう点も踏まえて進めさせていただくということで、この総合教育会議としての方針は決定したいと思います。ありがとうございました。

【本條委員】 課題の中で轟委員が言われた、「統合、吸収」というお話ですが、過去に本市（洲本市）で中川原中学校が当時同じ状況で、その際は「統合」という形ではなく、指定の校区を変更し、「洲浜中学校に中川原の子どもたちは行きなさいよ」という指定をさせました。この場合「倭文の子どもは三原中学校に行きなさいよ」という校区指定をされたら、特に大きな壁はなしに進められると思います。参考までに。

【守本市長】 ありがとうございます。今いただいた意見も参考にして、具体的なところは教育委員会の方でやっていただきたいと思います。ありがとうございました。

他によろしいでしょうか。

それでは、次の議題に進みたいと思います。次は「英語・防災教育について」です。事務局より説明をお願いします。

【山川学校教育課長】 英語・防災教育について、資料の8頁をご覧ください。まず英語教育についてですが、「1. 英語教育推進委員会で推進方針を決定し、移行期や新教育課程のカリキュラム編成を進めている。2. 小中が連携して授業研究・情報交換を行ったり、淡路三原高等学校と連携し、合同授業研究を実施したりしている。」これが大

まかな全体像です。そのあとは、配置したりしているものを載せております。

1) 市内全小中学校にALTを配置

・小中全校にALTを配置し、ネイティブの発音に慣れる環境を整えている。

2) ST（サポートティーチャーの略：日本人の外国語活動支援員）の配置

・各小学校にはSTを配置し、担任・ALT・STの3人体制で授業を行っている。

3) ALTを活用した放課後補充事業

・沼島小全校生を対象に、放課後子ども教室の中で「えいごタイム」を実施する。

・沼島中全校生を対象に、水曜日放課後に、英語の教科書を中心に復習を行う。

4) ICTの活用による授業改善

・小学校では文科省のデジタル教材、中学校では単費で購入した英語のデジタル教科書を使うなど、ICTを活用して授業改善を図っている。

5) ふるさと学習 英語副教材「COOL AWAJI」を配付

・ALTやSTの協力により、淡路の良さを英語で話せるようにするための冊子「COOL AWAJI」を配付し、小学校6年生に指導する。

・ALTやSTが出演する「英語講座『COOL AWAJI』」をさんさんネットで制作・放映し、英語に親しむ環境を整える。（準備中）

6) 市内幼稚園・保育所へのALTの派遣（子育てゆめるん課）

7) 兵庫教育大学サテライト講座「新学習指導要領のポイントと指導方法」

・兵庫教育大学大学院の吉田達弘教授を招聘し、小・中学校の担当者、ST等が参加し、指導法のヒントや小中の英語教育について研修を受けた。

以上が英語教育でございます。

続きまして、防災教育についてですが、「1. 自らの命は自らで守る力を身に付ける従来の安全教育に加え、『人としての在り方、生き方』を考える防災教育を推進する。2. 児童生徒自らが防災学習を通して防災意識を高め、将来にわたって主体的に南あわじ市の防災に関わり、安心・安全なまちづくりに貢献しようとする態度を養う。」とすることで取組んでおります。

1) 防災ジュニアリーダー養成事業（中学生代表、小学生高学年も参加可能）

・「防災ジュニアリーダー合宿」「東北ボランティア活動」への参加。

・体験したことを各校や市のイベント等で発表し、人の思いを語り継ぐ。

2) 舞子高校防災出前授業

・舞子高校生が児童生徒へ防災出前授業を行う。年3回（1回2校）実施。

3) 教育長防災出前授業

・教育長自らが出向き、体験談や実践、思いを語る授業。

4) 福良小学校「先導的実践研究（文部科学省指定）」*3年間指定の2年目の研究

・防災の視点を意識した教科カリキュラムを作成・検討・検証（先進的モデル）。

5) 市総合防災訓練への参加

・各学校から、児童生徒への周知。積極的な参加の呼びかけ。

以上でございます。

【守本市長】 ご意見、ご質問ですが、その前に教育長の思い等があればお願いします。

【浅井教育長】 では2つまとめて話させていただきます。1つは、課長さん方にお話しさせてもらっているのが、英語教育にしても、防災教育にしても、教育委員会全体が同じ方向を向くような取組みをしてもらいたいと、防災も英語も学校教育だけが遂げられたらいいというのではなく、例えば公民館の講座で「親子で学ぼう防災教育」とか「親子で話そう英語」とか、そういう要素を公民館の講座に取り入れてもらう、地域の取組みにも入れてもらう、図書館、学校には、防災コーナーを見える所に置いてもらって見えるように防災の本を置いてもらう、英語の読み聞かせみたいなものが出来るのであれば英語で読み聞かせしてほしい、そういうようにいろいろな立場で、今、教育委員会がどんなことを取り組もうとしているのか、ということでアンテナを高くして、その重点的に取り組もうとしているものに関しては、それぞれに出来るものはやっていってくださいと、方向性を示してほしいという話をさせてもらいました。そういうようなことが大事なのかなということが1点、それと防災教育に関して市長から「逃げない大人をどうするのか」ということが大きな課題ということで宿題をいただいております。逃げない大人をどうするのか、これはたぶん、逃げるためのスイッチみたいなものがあって、そのスイッチをいかに入れるかという部分で、どういうように取組みしていくのか、ということだろうと思っております。1番目の刺激だけではなかなか動けない、2番目、3番目、4番目と刺激があつて初めて動くように、逃げるというスイッチが入るのかなというように考えた時に、1番目は防災無線で「逃げなさい」という情報が流れてくる、2番目は近所の方が「逃げよう」という情報で刺激を与える、3番目は家族や子どもたちが「おじいちゃんが逃げなかったら僕も死んでしまう」というような、逃げないということは、子どもたちにも「逃げない」というメッセージを送っているということ、子どもたち自身で家族に言えるような防災教育が必要なのかなと思います。1番目、2番目、3番目、4番目と逃げない大人に伝えられるようにするためには、どうしたらいいのかという観点で防災教育を考えていきたいと思っております。以上です。

【守本市長】 それでは、委員の皆様のご意見があればお願いします。

宮崎委員お願いします。

【宮崎委員】 英語教育ですが、小学校にALT・STを配置し、担任を含めて英語の授業をした時に、子どもたちはALTに対し、どんな反応をしているのか、私個人的な経験ですが、小学校低学年の時に英語の塾に行ったのですが、そこで拒否反応が出てしまいまして、その後、中学校に入った時も英語に関しては苦勞した経験がありまし

て、今の時代は英語教育というのは必要なのかなと思うのですが、先生方や周りの人から見て、子どもの反応というのはどんな感じなのか、みんながすごく楽しんで英語に馴染んでいるのかどうか、子どもの様子を教えていただければと思います。

【守本市長】 委員の皆さん全員の意見と質問を聞いてから、まとめてということよろしいでしょうか。

轟委員お願いします。

【轟委員】 小学校2年生と、幼稚園の孫がいてるのですが、我々の時代というのは英語は選択教科でございまして、戦後の時代だったので、英語は大したことがないという意識できておりました、大学へ行ったり、いろいろとしていく中で英語というのは大切なんだと、ところが先ほど宮崎委員が言われたとおり、拒否反応がありまして、いまだに英語に対する拒否反応があります。小学校の子どもを見ていると、いろんな教材を与えて、今、耳から教育をしております。これで会話が出来ようになるのかなと、心配なところですが、我々の時代もそうですが英語が出来ても会話は出来ないというのが現実だったので、会話が出来るといふことで、ALT・STと担任の3人体制で授業に入っているのだと思いますが、文法ばかりではなく、日常で使えるような指導をすることによって防災教育に生きてくるのではないかと考えております。以上です。

【守本市長】 数田委員お願いします。

【数田委員】 英語教育ですが、存在の意識を徹底するというか、とにかく普段から耳慣れたり、話たり、慣れていくことが大事だと思います。息子の嫁も一番下の子どもに朝から「Good morning (グッドモーニング)」と言って、3歳の子どもの「Good morning (グッドモーニング)」と言って楽しそうにしています。先ほど教育長もおっしゃられたように、保護者、地域の協力も必要だと思います。英語なしでは、大人になって仕事をして何をして、なくてはならないものだと思うので、そういう流れみたいなものがあれば、変わっていくのかなということで、いろいろなコミュニティ、カリキュラムをやっているのですが、そんなものも必要かなと思ったりします。

防災教育についてですが、11月4日は防災訓練の日ですが、主人が「防災訓練は自分だけ行けばいい」と言っていて、家族の中で避難場所が本当に適切な場所かということで、家族の中で話題になっているのですが、そこは無理だと言っていて、何キロか離れた所までは、一旦下って上がるという場所なのですが、そこは津波が来た時に一番流れてくる筋になる所ではないかと、素人判断で言っているのですが、各地区でもそういうようなことがあるのではないかとと思うのですが、本当にそこが適切な避

難場所かと、地域の方の声が反映されないまま決められている部分があるのではないかと不安に思う所があるので、その辺がすっきりすれば、防災訓練に「家族みんなで行こう」となるのではないかと思ったりします。そのあたりを協力してほしいと思います。孫たちは小学校でいろいろ教えてもらっているから、こちらが孫に教えられます。「こんな時は、こうしないといけない」とか、「こういう時は、こっちへ行く」とか、彼らの方がちゃんと頭の中に入っていて、こちらの方が教えられることが多いです。防災教育は随分定着しているなど実感します。ただ、先ほども言ったように、地域住民が全部集まらなかったということで、軽視しているところがあったり、理由はいろいろあると思うのですが、そのあたりが今後の課題かと思えます。以上です。

【守本市長】 狩野委員お願いします。

【狩野委員】 英語教育についてですが、社会に出て活躍する人を育てるには、英語は重要だと思います。小さい時から英語にふれさせていくということは非常に大事なことです。すでに小学校でこのようにいろいろな英語教育をサポートするための方策がたくさん出てます。なぜ英語が必要なのかということ、小学校の先生自身もその辺を感じ取らないと、自分は英語が苦手だから指導できないということではなしに、今の時代必要であるということ、小学校の先生自身の認識を上げることも大事ではないかと思えます。特定の方ばかりが教えても、と思います。それから、英語は小・中連携、中・高連携ということがすごく大事なことで、小学校で英語が好きになったら良いのですが、嫌いになってしまったら、中学校になった時点で「英語が嫌い」となってしまうということがゼロではないと思います。そうならないように、お互いに小・中、中・高の連携は英語にとっては必要だなと、そこで途中で分断されないようにと思ったりします。

防災教育についてですが、東北の震災で何万人という命が、あっという間に亡くなり、そういうことを考えると、命を守る教育、命の尊さを教える教育というのを、教育長さんがいつもおっしゃっているということは、すごく大事なことだと思います。そういう面で、防災は単なる防災ではないということ、教育長さんがいつもおっしゃっていることは、私もその通りだと思っております。いろんな所で「命の大切さ」を教えることが大事なことだと思います。以上です。

【守本市長】 岡委員お願いします。

【岡委員】 最近の子どもは英語教育に恵まれているなどと思います。自分たちの時代にもこれくらいしてくれてたら、もう少し人生変わっていたのではないかと思っております。英語が嫌いでした。それと、地域の中で英語を使う機会というのは、なかなかないんですね。都会の場合は、外国の方が周りによくいてると思うので使えると思

ますが、淡路で外へ出て英語を話せるかという、相手がいないですね。そのような環境も何とか出来ないかなと思います。修学旅行では、外国人の方に積極的に話しかけるようにしているようですが、そのようなところでないと英語を使う機会がないように思います。せっかく一生懸命に英語をやっているのだから、淡路でも英語を使う機会がもっとあれば良いのと思っております。

防災教育については、学校訪問をしたら、教育長の強い思いで、防災教育に対して一生懸命取り組んでいる様子が各学校でうかがえます。言い続けるということは大事なことだと思います。また教育長にも頑張ってもらいたいと思っております。以上です。

【守本市長】 本條委員お願いします。

【本條委員】 英語教育、外国語教育については、特に新学習指導要領が33年から完全実施になるところですが、課題は先ほど狩野委員が言われたように、教師の指導力、特に小学校は英語の教員免許を持っていない中での指導というのは、かなり厳しいところがあると思います。そのための補助教材があるのですが、基本的には3・4年生は英語活動で親しみやすいようにゲームとか音楽、歌を交えながら現在取り組んでいるかと思います。高学年の5・6年生は会話も踏まえて、補助教材、もちろん教科書もありますので、そのあたりを活用していると思います。4番に書かれているように、デジタル教材はかなり有効で、板書もわざわざ英語を書かなくても、そこに書き込むこともできるし、子どもに言って、自分の意見も書かすこともできるので、このあたりも十分活用しながらいけるかなと感じております。中学校の先生が大変なのは、私が20年ほど前ですが、ALTが入った時に大騒動したことを覚えています。33年度からは、教室に入った時からすべて英語で話すという流れになるみたいです。そのあたりは英検のレベル、いわゆるTOEIC（トイック）とTOEFL（トーフル）とか実用英語のところを磨いていかないといけないと感じております。

防災教育につきましては、浅井教育長さんをはじめ、いつも教えていただいているのですが、今年起きた6月18日大阪北部地震がある意味で、訓練になったのではないかと思います。7時58分の学校登校時で、学校の対応を調べたらまちまちでした。校庭に集めた者、一旦教室に入っている者は机の下に隠れなさいと指示したり、道中はもちろん工面することがあったと思いますが、その時は意識しないまま登校させておりますし、あの時の検証が今後役に立つと思えました。以上です。

【守本市長】 浅井教育長の方からお願いします。

【浅井教育長】 私の方からは、関連して答えられる部分をお話しさせていただきます。先ほどの話の続きになりますが、英語は先生の拒否反応みたいなものが非常に多い

ということで、それをどう乗り越えていくかという部分があるのですが、私は小学校の先生方に提案したのは、全部の授業、「おはようございます」「席立って」「席座って」とか、「今からこの授業をします」などの定例の語句があると思いますが、それを全部英語でやったらどうかと、先生方が教室に行ったら「おはようございます」から始めて「起立」「着席」など、誰が行ってもいつも言う言葉に関しては、全部英語で言うとして学校で決めたらどうかと提案させてもらったのですが、未だやっている学校はないという状況です。ということもあります。ある学校に行ったら、階段の所に英語で単語を貼ってあったりと、そういうことを少しずつ、授業で英語の活動だから英語をするということだけではなく、いかに自然に生活の中で、そのような取組みが自然と子どもたちの中に入っていき環境づくりが一番大事なのではないかと思っております。細かい部分については、山川課長からお願いします。

【山川学校教育課長】 英語の授業の様子をお話させてもらいますと、小学校の時点で英語嫌いにさせないということが最も重要なところで、出来れば英語を大好きにして中学校に送りたいというのが、小学校の立場かなと思います。現在、低学年でも外国語の遊び程度の感じで、英語の歌であったり、ゲームであったり、そういうことをやっております。中学年もそういうことをやっております。基本的にALTの方は、小学生に対してはフレンドリーに接してくれています。子どもたちは今見ている限り、ほとんど抵抗はないです。ただ、いろいろな子どもさんがおりますので、英語をしゃべることに苦手意識を持っている子どももいると思います。そのためにSTがいるのですが、担任の先生もALTとやるのが若干不安で、そこも繋いでもらいながら、子どもとも繋いでもらう役をしてもらっています。例えば英語でALTに問いかけられて、上手く答えられない子どもの所へ行って耳打ちしてあげたり、そういうような役回りやしてもらったり、それから、きれいな発音の英語を子どもたちみんなが聞き取るというのは、なかなか難しいところがありまして、ALTが言ったことをもう一度担任の先生が言って、日本人の言った言葉は何となく聞き取れるとか、そのような効果もあって担任の先生が前でやって、STがその間を取り持ってもらおうという形で今やっております。かなり効果が出ていると思っております。これが上手く中学校に繋がっているかということ、中学校は出口もありますので、そこの知識的なことを教えるという部分も入れないといけないので、そこは中学校は苦慮していると思います。そのような状況です。以上です。

【守本市長】 私も少しだけコメントさせていただくと、自分の経験からして、英語アレルギーではなかったんです。うちの父親は車で一緒に走っていると、外国人の方がヒッチハイクしていると乗せるんです。本当に一言だけ、例えば「船で来たのか」というのを「シップ (ship) ?」と訊くだけなんです。そのように何となく会話をしているので、子ども心に「簡単だな」というようなことがあって、私はSTの人は、英語

が出来る人である必要はないのではと思います。逆に下手でもALTの人と適当に話をしてる方が、親しみやすいのではないかと思います。これはフランスですが、小さい娘を2人連れて行ってたのですが、小さい頃からネイティブに慣れると、全く耳が違ふんです。私たちがついていけないくらい、何を言ってるのか分からないことでも聞けるんです。だから小さい頃からやる英語は大事かなと思います。それから、自分なりに一番役に立っていることで、少し気になったのが、中学校の英語で筆記体というのは今はやってないのでしょうか。筆記体は絶対にやった方が良いと思います。私は仕事で使っていたのですが、メモを取るのに活字体は不可能です。筆記体で「i」とか「t」の「[˙]」、「⁻」をやらないで書くとものすごく速く書けます。後で見直す時に「[˙]」、「⁻」を入れていくと議事録ができるということで、一番役に立ちました。だから筆記体は是非やった方が良いと思っています。余談です。

防災教育は、数田委員がおっしゃっていただいた、正にそれが狙いで、「おじいちゃん知らなかったん？」というように言ってくれる子どもがたくさん出てきてくれることを思っております。

それでは、次の「今後の教育施策について」ということで、これはご紹介ということで、まとめて事務局の方から説明をお願いします。

【原口体育青少年課長】 放課後子ども教室についてですが、まだ計画中ですので資料等は準備しておりません。簡単に方向性を説明させていただきます。南あわじ市では、現在、放課後居場所づくりとして、学童保育事業と放課後子ども教室を開設し、事業を運営しております。学童保育事業につきましては、16校区のうち13校区で設置し、2校区については送迎型保育で行っております。保護者が就労のため昼間を留守にする家庭の児童が対象であり、平日週5日、長期休暇についても開設しております。また、子ども教室については、16校区のうち5校区で設置し、平日週1日～2日、全ての子どもを対象として開設し、また、夏休み期間中については、チャレンジ教室など2つの事業を行っております。今回、この両事業を融合させた新しい放課後子ども教室事業として「アフタースクールプロジェクト」を開校していく方向で計画を進めております。すべての子どもたちが参加でき、学習プログラムや体験プログラムなどを行い、地域の方のサポートや、企業と連携しながら放課後を活用したプロジェクトを目指していきます。平日対応といたしましては、現在実施している学童保育や子ども教室の居場所を活用し、内容を拡充していきます。例えば、学習プログラムでは、宿題の予習・復習の指導、補充学習など、体験プログラムにおきましては、英会話、囲碁、将棋、クッキング、魚釣り、ミュージカル、プログラミング、ダンスなど、スポーツプログラムとしては、一輪車、サッカー、陸上、野球、ボルダリングなどを考えております。プログラムの指導者は、地域の人や、企業などからの派遣とします。夏休み対応といたしましては、現在、夏休みチャレンジ教室や、やまの学園を開設しておりますので、引き続いて行い、また来年度からは、従来の事業に加え、沼島体験

宿泊ツアー、青少年交流の家とのタイアップ事業などを考えております。課題もいろいろとありますが、31年度からはモデル教室をつくっていき、課題等、調整しながら、運営体制をつくりあげ、徐々に実施箇所を増やしていきたいと思っております。以上です。

【守本市長】 次に学校開放について説明をお願いします。

【山川学校教育課長】 現在、体育青少年課、学校教育課、教育総務課の方で何名か集まって協議を進めているところです。趣旨といたしまして、「子どもたちの自由な遊び場を確保し、親子や家族のふれあいの場、地域住民の交流の場とするため、南あわじ市内小学校の運動場を一般に開放する」というところと考え、概要としましては、「①南あわじ市内小学校の各運動場の全部または一部を土曜・日曜及び祝日に開放する。②学校行事、公的行事や地域行事を優先する。利用登録をしている社会体育の団体や予約している場合も、その活動を優先する。③利用者は、利用ルールを守り、他の利用者と譲り合いながら、自らの責任において利用する。」というようなことを軸に、今協議をしております。我々が協議を始めた頃と、若干違うところがございます、事業規模のところであったり、特に協議の中で出てくるのは、施設の管理がどうなるのか、自己責任と言った時にいろいろな問題が起きるのではないかと、管理人員等を置かずに考えているのですが、このような心配があります。それから、有料団体、いわゆるきちんと登録をして使っている人と、学校開放で入ってきた人との差別化をどうするのか、というところで必要なか必要でないのか、普通は両方できると思うのですが、無料というところを逆に上手く利用してくる人が出てくるのではないかと、このあたりで心配も出ております。協議の途中の段階ですので、このあたりでの説明とさせていただきます。

最後の高校生の流出につきましては、10頁をご覧ください。市内の卒業生の進路状況を把握するために、毎年4月にこのような一覧表にしております。これで29年度の中学校の卒業生進路先状況が分かるかと思えます。割合については四捨五入でパーセンテージを出しておりますので、2人いても0%となっております。淡路三原高校の割合は47%で、本年度は島外公立学校への進学が13名、そのうち第1学区の島外進学者は7名で、今までは26年度2名、27年度4名、28年度2名ということで、29年度は少し増えているという状況です。生徒数が減っていることに合わせて、高校のクラス数も減っておりますので、このあたりで進学に関して各中学校の方も頭を悩ませている状況でございます。以上です。

【守本市長】 学校開放についてですが、子ども議会というのを、南あわじ市ではやっております、その中で子どもさんの質問で非常に多いのが、遊び場の確保なんです。一般的にいうと公園みたいな話をされるのですが、話をよく聞いてみると、やりたい

のは球技だったりするんです。そうすると、なかなか普通の公園では難しいというようなこともあり、また、公園全体でいろいろな遊具をやっていると、メンテナンスが出来てなくて怪我をするということになるので、出来るだけ目の届く所でやりたいと考えた時に、学校の施設の活用ということをもっと考えた方が良いのではないかとということで、方針として検討をお願いしていたものです。将来この地域のことを考えた時に、社会に出てまた戻ってくる基盤というのが何かというと、学校での人的な繋がりということが非常に大きいということもあって、できれば淡路島の高校に行く子どもたちを増やしたいと、これは高校の校長先生の思いでもあるわけですが、そうすると、どうすればいいのかというと、答えはないわけですが、私の方から校長先生に「一度、淡路の市長、校長先生、教育長が集まって話をする機会を作りますか」というようなこともお願いをして、これは県の教育事務所長さんにもお願いをしておりますけれども、そのような中で話をしていたらいいのではないかと考えております。やはり、出ていく子どもたちというのは、いろんな事情があると思いますが、進学とかスポーツとか、ただ、そういう理由で出ていく子は、逆に言えば、島内に受け皿を作ってあげれば島内に行く、全員とは言いませんが、可能性として高いということで、その受け皿の作り方を島全体として考えていく必要があるかと考えております。例えば、この夏の甲子園は、淡路の高校は出てませんが、淡路の中学校を出た子が少なくとも6人、レギュラー、スタメンでね。仮に、この子どもたちがまとまって淡路の高校に行ったらどうなっていたか、こういう話ですよ。子どもの数が減っていく中で、どんなことが言えるのかというと、一つのアイデアとしてですが、重点部活として、この高校はこれと決めて、そこに良い先生を配置をし、また、今は部活補助員とかありますので、そういったことをやって、ある程度上を目指す子どもたちの受け皿となるような場所を造ってあげるとかですね、勉強の方も一緒だと思いますが、例えば、淡路三原には理数系のクラスがありますが、そこをもっと底上げすることによって、より上を目指す子も、そこで取りに行こうかという形をとっていくのも可能ではないかと、ただ、これは1つの南あわじ市だけで話をしても上手くいかない、やはり全島的にやらないといけない、そんな思いで問題提起を3市にさせていただいております。まだ、具体的に何がというのは全くないのですが。

というところで、ここは皆さんフリーディスカッションということでやりたいと思いますので、どうぞご意見いただければと思います。

【狩野委員】 放課後子ども教室について、小学校に限定されると思うのですが、小学校との連携をもちろんやっていると思うのですが、より連携を密にしてほしいと思っております。何かというと、学校で全く問題がないのに、放課後子ども教室で開放されて、問題行動を起こしていないかとか、宿題については、放課後子ども教室から帰って、親が宿題をやったのか聞くと、もうやったきたとの返事で、学校は家庭で学ぶ時間が少ないということが課題だとよく言いますが、放課後子ども教室で宿題をやって

いるのなら、家でしなくていいということで、親が家で子どもが勉強している姿を見ないことの方が多いのではと思います。その辺は、ある程度、「これはやってもいいけど、これはお家の人としなさいよ」とか、そういう問題行動とか学習についても、お互い連絡会みたいなものを小学校とやった方が、子どもにとっても良いのではと思います。その辺を検討していただければと思います。以上です。

【本條委員】 狩野委員が言われたところで、放課後子ども教室、それから学童のスタート地点ですが、学童は、都会で働く親の子育て環境を整えるというところからスタートしていると思います。一方、放課後子ども教室については、平成13年に学校週5日制が学校現場に完全に入り込んだ時に、土曜日の子どもの居場所をどうするのかというところで、社会教育の分野からスタートしていて、先ほどの学童の方は、健康福祉の方からスタートしているために、二重行政が長く続いてきているという、そういう中で、洲本市もまだそのしこりというか、議会とか地域の人から見たら、どちらも一緒なんですよ。特に親から見たら。そのあたりの棲み分けも、いま現在しながらなんですが、先ほど聞いた「アフタースクール」が、良いやり方だなと感じております。成功したら、洲本市も検討させていただきたいと思っております。

高校の進路ですが、第1学区のしぼり、いっそやるのなら全県1区だと、その時思っていたのですが、特に淡路の北側はどんどん神戸に抜けています。神戸の高校へ行った限りは戻ってこないし、淡路にとっては、ますます少子化に拍車をかけられている施策ではないかと思っております。それぞれ魅力のある、普通科を抱えてる3校、淡路高校、洲本実業高校を含めて特色を出していただいているところですが、端的にスポーツをやるなら甲子園を目指せる学校、四国の高校にも抜けてる中で、進路では神戸高校とか兵庫高校、星陵高校へ淡路から行ってます。魅力ある高校というのはどうあるべきか、どうしても数字がひとり歩きしてしまいます。どこの大学に何人合格したとか。みんなが自分の進路を見極める選択ができる高校であってほしいなと思っております。以上です。

【轟委員】 我々が現場にいた時は、中学校卒業生の流出というのは、ほとんどなかったです。我々のところで止めていて、大阪から来るとか、京都から来るとかというのは、監督同士のコミュニケーションがあったから、止まったのですが、今は自由自在に淡路から出ていっている、特に野球とかは、早く硬いボールを触った方が良いということで、阪神あたりに出ていっている、今、陸上競技の方でも香川の方へ出ていっているということです。若い指導者には申し訳ないけれども、魅力がないような感じなんですね。仮に、サッカーするならこの学校へ行きたい、野球やるならこの高校へ行きたい、陸上するならどこの学校がいいとか、昔はあったんです。それが今、ほとんどないというよりも、全国大会へ行かないですからね。やはり、毎年、全国大会へ行っていれば、あの学校へ行けば、全国大会へ連れて行ってくれるということで、み

んな来ると思いますが、それが何年に1回とかの状態、中学校の指導者も安心して任せる高校の指導者が少なくなっているというのが現実です。それと地元の先生が減ってきているということです。島外の先生が来られて、何年か淡路にいて、また島外へ帰っていくということですね。淡路の教師を採用しているのかなと思います。我々から見たらそれでいいのかなと思います。これを止めるのには、淡路の高校の校長さん方が、学校に良い指導者をとってきて育てるということ、もう一つは、地元の指導者がいるのなら地元の指導者を入れて地域と一緒に育てるということ、そうすれば子どもの流出はある程度止まるのではないかと思います。以上です。

【數田委員】 部活動関係は、轟委員が言われたようなところもあると思うし、地域の指導者が来れるようなシステムが出来ればと思います。中学校の野球でしたら、ボーイズリーグですか、そういう視点が違うところでしている保護者もいますので、そういう大きな流れが一方であると思います。なかなか地元へというのは難しいかと思えます。もう一つは、外へ向ける理由として、神戸高校、兵庫高校、星陵高校とかの流れの中で、各学校がそれぞれの特色を出して、特化するようなカリキュラムとか、そのようなことが出来ると思うのですが、そのあたりもなかなかスムーズに行っていないというのと、あとスタッフですね。淡路の教員の場合、新採で4年ないし6年いて、また帰るという中で、なかなか流れとして定着しないというのがあったりして、そんなところもあるのかなと思ったりします。最初、県も個人の希望を聞いて人事を決めますが、やはり新任何年で異動するというシステムの中で、それと違った、その学校に対する思いというか、昔は愛着を持って、ここに骨を埋めるみたいな気持ちで仕事をされていた方も大勢おられましたが、そういう何年かで異動するということが始まってから、変わってきたかなと思います。それをどうするのかということは分かりませんが、学校に対する、地域に対する思いみたいなものが希薄になる中で、その辺も変わってきたのかなという気もいたします。いろんな条件が、そういうことになっているのですが、ここですぐに解決するものでもないのですが、そのように思います。それと、昔と違って、情報がたくさん入ってきますし、昔だったら、ここしかないというような形で考えてましたが、それから、交通の便が良くなって、そのようなことで、保護者の視野も広がったし、可能性も広がるし、というところでなかなか歯止めがききにくい状況があるかと思えます。それと、淡路の北の方の場合は、バスに乗って南の方へ来るより、東浦からバスに乗って神戸方面へ行った方が確実に経済的なんです。とんでもないほど経費に差があります。バス会社との連携も必要ではないかと思えます。そんなところも一つの対策になるのではと思います。以上です。

【守本市長】 今の経費に関しての話ですが、南あわじ市は島外へ出る場合は補助を出しているのですが、それを止める、あるいは逆に洲本に行く子の補助を出すという、政策としてはあり得るのですが、それで止まるのかなと、正直なところありますよね。

仮に例えば、島内に通う時に補助を出すということにすると、理屈は流出を止めるというのは多分不可能だと思います。例えば、その理屈で補助したとしても、流出は止まらない、政策として成果を上げないことになってしまうのですが、例えば、島外の高校で、それぞれに特色を持つ、そうするとどうしても遠距離通学が増える、それについては補助する、そういう考えはあり得るかなど、淡路市も今度、コミュニティバスを津名高校まで出しますので、その部分は解消されると思います。次のステップとしていうと、今の津名高校でいいのかということ、そうでもなくて、津名高校の魅力をどうやって知らせるかというのがないと、やはり経済の問題はさておいても、こっちの学校の方が良いとなってしまうと思います。ついでに、重点部活というのは、中学校くらいで考えてもいい時期にきているのではないかという気がします。倭文の話でも少しありましたが、三原に行くか、広田に行くかというところで、仮に重点部活があつて、その部活をやる場合にはということ、広田に行ってもいいということは可能性としてはあるかもしれないという気はしております。

【岡委員】 こんなに島外へ行っているのかと驚いております。昔、私は三原中学校、南淡中学校に勤めていて、今の生徒数の倍くらいいたのですが、島外へ行くというのはほとんどなかったように思います。進路となったら島内の高校で、南淡中学校で津名高校へ行った子は1人いましたが、ほとんどが南あわじ市内の高校へ進学していましたので、今の進路先状況を見て驚いています。以上です。

【宮崎委員】 広田中学校の卒業生の進路先ですが、やりたい部活動があつてこの学校へ行きたい、この高校のこの学科に行きたいということで選択している子どもがほとんどです。やはり、島内にも魅力ある学校がありますが、中学校の時のいろんな検索で、ここへ行きたいという子どもの意思と、親の協力と、その辺が時代の流れかも分かりませんが、そういうようになってきているのかなと思います。沼島中学校の卒業式に行かせてもらった時に、先生から進路を教えてもらったのですが、沼島からだったら、島内の学校へ行くのも、島外の学校に行くのも同じ形なので、先を見据えての学校を選択していると説明を受けました。いろんな選択肢の中で、沼島の子からしたら、淡路島内、淡路島外も感覚としたら先を見据えて動いていると思った時に、島内の高校の選択としたら、寂しいのかなと感じました。以上です。

【浅井教育長】 放課後子ども教室については、市長が言われてたように、放課後の子どもたちをどうしたらいいのかという方向性を、今、合わせているということだと思っております。学校開放については、なかなか問題が多く、自己責任でやろうと、使い方のルールみたいなものを自分たちで守るのも、一つの教育だという観点で進めてほしいという話をしているのですが、先ほど山川学校教育課長の方から話があったように、学校の先生は「怪我をしたらどうするのか」「物理的に瑕疵があつた時はどうする

のか」と、そういうような議論ばかりになって、なかなか前へ進まないという状況なので、古いものは全部替えて、新しいものを入れたら良いということで、進めたいと思っております。学校というのは一番身近なところであるし、土日も開放するのですが、それ以外は、子どもたちが休み時間使ってもらおうと、そういう意味では、公園で土日しか人が来ないという所と違って、365日使ってもらえればと、そういう意味でいったら導入する利点というのは非常に大きいだろうと思っております。高校生の流出については、市長が言われるように、魅力づくりしかないというように思っております。ただ、魅力をつくるだけでは集まってこない、それは何かと言えば、そこに学力があって、学力にあった生徒しか今入れないという現状がある、それをどのように制度設定し直すのかというところが、一番大きな課題かなと思っております。以上です。

【守本市長】 ありがとうございます。最後の部分は、長期的に今後を見据えての問題提起ということでお願いしたいと思っております。

今日は長時間、いろいろとご審議いただきましてありがとうございます。今後とも、南あわじ市教育行政への更なるご理解とご協力をお願いいたしまして、平成30年度第2回総合教育会議を閉じたいと思っております

本日は大変ありがとうございました。

閉 会 午後0時00